



Kernel通信

神戸大学附属図書館電子図書館係

(Issue Date)

2022-09-22

(Resource Type)

other

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100476337>





研究者紹介 國谷紀良先生

この通信では、**Kernel** で論文を公開されている研究者をご紹介します。今回は國谷紀良先生 (システム情報学研究科) です。

新型コロナウイルスが 2019 年度末に流行し始め、2 年半が過ぎました。新型コロナウイルスの感染状況の予測をほとんどの方がニュースなどで目にされたのではないのでしょうか? そのような予測をされた研究者の 1 人が國谷先生です。國谷先生のご専門は感染症流行の数理モデルで、数学と生物学が融合した数理生物学という応用数学に含まれる分野です。

インタビューでは研究を中心にお話を伺い、①先生のご経歴: 抽象的な数学を学ばれていた國谷先生が数学を社会の中で実際に応用する分野を進路に選択された経緯、

②先生の研究内容や新型コロナウイルス流行で研究・研究分野にどのような変化があったのか? ③研究に関するデータの入手や保管についてなどなどが話題にのぼりました。その他にも論文をオープンアクセスにされていることや図書館の利用についてもお聞きしました。

インタビューをさせて頂いたなかで、イタリアにあるトレント大学の図書館で國谷先生が本を読まれた話が印象に残りました。イタリア語は読めないけど、数式で内容がわかる。言語を跳び超える数学の抽象性が琴線に触れました。ぜひ、以下のページよりインタビュー全文をご覧ください。



 インタビュー全文

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100476337>

 **Kernel** で公開されている國谷先生の論文

https://da.lib.kobe-u.ac.jp/da/kernel/search/advanced/?mode=1&kywd1=A1008&con1=c_code_auidh

特集： ハゲタカジャーナル

本特集では、ハゲタカジャーナル/出版社（Predatory Journal/Publisher）をめぐる学術出版業界の動向について纏めました。

ハゲタカジャーナル/出版社に関する問題提起

電子ジャーナルで掲載論文をオープンアクセスにする「ゴールドオープンアクセス（Gold OA）」では、著者側が出版社に APC（Article Processing Charge；論文処理費用）を支払って公開するモデルが一般的です[1]。オープンアクセスの普及に伴い、APCの不当な取得を目的とした低品質な学術誌とされる「ハゲタカジャーナル」（捕食ジャーナル、粗悪学術誌）(*1)およびその出版社である「ハゲタカ出版社」の問題が顕在化してきました。

2010年にハゲタカジャーナル/出版社という用語で問題提起を行ったのは、米国コロラド大学デンバー校の図書館に（当時）勤務していた Jeffrey Beall 氏です[2]。Beall 氏はハゲタカ出版社を「著者支払型の論文出版モデルを、職業上の規範に反して悪用することで利益追求を図る出版社」と定義し、疑いがあるとしたジャーナル/出版社のリストを公表しました(*2)。大きな反響を呼んだ Beall 氏の調査を契機としてハゲタカジャーナル/出版社が国際的な問題として認知されるに至り、学術界では今日まで様々な検討/情報共有がなされてきています。

ハゲタカジャーナルの特徴

以下のような特徴を有する学術誌が、ハゲタカジャーナルと称される傾向にあります[2][3]。

- ・ 査読を全く、あるいはほとんど行わないため著しく短期間となる
- ・ 低品質な論文や誤情報/研究不正がある論文でも掲載する
- ・ APCの料金体系や出版プロセスが不透明である
- ・ 論文の著作権処理や撤回についての情報を開示しない
- ・ 研究者に論文の投稿、編集委員会への加入などを促すスパムメールを頻繁に送信する
- ・ 査読者や編集者、評価指標(*3)、本社の所在地などについて虚偽の情報を公開する
- ・ 既存のジャーナルに偽装した誌名、ISSN、ウェブサイトなどを用いて投稿を誘導する(*4)
- ・ 研究者をハゲタカ学術集会（Predatory Conference）(*5)へ勧誘する

投稿のリスクやデメリット

論文をハゲタカジャーナルに投稿した場合は研究者自身や所属機関、学術研究全体に様々なリスクが生じます[2][3]。

- ・ 正規の研究と認められず、研究者や所属コミュニティの信頼性/キャリアが損なわれる
- ・ 論文の撤回を求めても応じられず、他のジャーナルに投稿できなくなる
- ・ 後から高額な追加料金を請求されてトラブルとなる
- ・ 主要な学術文献データベースへ掲載されずに発見可能性が下がる
- ・ 論文への安定したアクセスが保証されず、サーバーやウェブサイトごと消失すると研究内容が証明できなくなる
- ・ 適切な編集プロセスを経っていない研究成果が査読付き論文として公開される
- ・ 質の低い論文が別の研究に引用されたり、医療行為/公共政策等で参照されたりすることで、学術研究や社会全体に悪影響を及ぼす
- ・ 学術研究のために政府、大学、研究機関等から拠出された予算が詐取される

投稿先ジャーナルの評価基準

このような問題を抱えるハゲタカジャーナルへの投稿を避けるため、研究者や学術出版社、関連機関の間で投稿先ジャーナルの評価基準を共有する取り組みが広がっています。本学を含む国内の大学図書館でも所属研究者に対して注意喚起を行い、学術誌を評価する際に参考となる指標を紹介しています[4] [5] [6] [7]。

■信頼性が高いジャーナル/出版社のリスト

- ・ DOAJ : Directory of Open Access Journals (オープンアクセス学術誌要覧) <https://doaj.org/>
- ・ OASPA : Open Access Scholarly Publishers Association (オープンアクセス学術出版社協会) <https://oaspa.org/>
- ・ COPE : Committee on Publication Ethics (出版規範委員会) <https://publicationethics.org/>

■一定の収録基準がある学術文献データベース

- ・ Web of Science (クラリベイトアナリティクス社) <https://www.webofscience.com/>
- ・ Journal Citation Reports (クラリベイトアナリティクス社) <https://jcr.clarivate.com/>
- ・ Scopus (エルゼビア) <https://www.scopus.com/> (*6)

■ジャーナル/出版社を評価するチェックツール

- ・ Think. Check. Submit. (適切な論文投稿先であることを確認するためのチェックリスト)

<https://thinkchecksubmit.org/journals/japanese/> [日本語版]

- ・ SciRev. (研究者が被査読経験を共有するウェブサイト。分野/ジャーナルごとの査読期間の目安を把握できる)

<https://scirev.org/>

しかし投稿先ジャーナルの評価に関して「完全に信頼を置けるツールや基準」は存在しないため、最終的には多角的な情報収集やヒアリングを行った研究者自身の判断に任せられます。

！ その学術誌はハゲタカジャーナルなのか

このように明確な指標がないなかでは、投稿誌を選ぶ際に判断に悩まれることもあるでしょう。明らかに悪質なケースを除いても新興のオープンアクセスジャーナルには疑わしい点を感じるものが少なくありません。

ハゲタカジャーナルをブロックするためには、それがどういったものかコンセンサスのとれた定義が必要です。この観点に立つてある会議では、次のような定義が提唱されました。

“Predatory journals and publishers are entities that prioritize self-interest at the expense of scholarship and are characterized by false or misleading information, deviation from best editorial and publication practices, a lack of transparency, and/or the use of aggressive and indiscriminate solicitation practices.”[8]

「学術性を犠牲にして自己利益を優先し、虚偽または誤解を招くような情報、最善の編集/出版方法からの逸脱、透明性の欠如、および強引で無差別な勧誘方法の使用を特徴とするジャーナルや出版社」

前述したハゲタカジャーナルの特徴を端的に表してはいますが、恣意的な表現が多く、客観性には乏しい印象を受けます。しかし、これ以上明確な定義ができないというのが現状とも考えられます。その理由の一つとして、体制の違いや変化により学術誌の質は変わりうるものが挙げられ、同じ出版社が手掛けていてもジャーナルによって質が異なる場合もあります[9]。一度ハゲタカジャーナルであると疑われながらも出版プロセスの透明性を上げ、APCの減額や免除といった措置を充実させることで信頼回復に努めている例もある一方で[10]、Beall's Listの基準に照らすと評価の高い学術誌も略奪的とみなされる場合があるとの指摘もあり[11]、ハゲタカジャーナルとみなされる対象は流動的です。また、ハゲタカジャーナルを忌避するあまり APCの高価な伝統誌への依存度が高まることは、学術出版業界との関わり方として望ましい在り方とは言えません。

！ ハゲタカジャーナルがなくなる日

研究者評価における論文業績数の重要性は高まり続け、世界的に出版される論文数も増加の一途をたどっています[12]。この流れを受け、信頼性の定かでない新興ジャーナルにも受け皿として一定の需要が生じ、ハゲタカジャーナルは社会的問題に発展するまで拡大しました。この傾向が続く限り、今後もハゲタカジャーナルの脅威を完全に除くことは難しいかもしれません。しかし、勢いを抑えるための手立ては幾つか提唱されており、特に査読の透明性を上げることには期待が寄せられています[13]。

査読の透明性を向上させる取り組みのひとつが、査読レポート(*7)の公開です。ハゲタカジャーナルによる査読詐称のみならず、不正な査読プロセスを除く効果も期待されています[14]。また、従来から散見されていた公正なコメントを行わない査読者を間引き、査読の質向上に繋がる可能性もあります。Nature 姉妹誌では、近年査読レポート公開オプションの導入が進められ (Nature Communications[2016-], Nature[2020-]等) [15] [16]、2021年にはNature誌へ投稿した著者の46%が公開を希望しています。しかし、内訳をみると分野によって希望の差が大きく、レポートの公開に消極的な分野があることがみてとれます。また、査読レポートの公開を行っているジャーナル自体まだ少なく、Publons(*8)に記録された査読ポリシーを持つジャーナル3,700誌を対象に行われた調査では、査読結果を公表することを認めているジャーナルは2.3% (2017年当時) に留まっています[17]。

査読レポートの公開をはじめとした出版プロセスの透明性確保は、ハゲタカジャーナルの生き残りにくい環境に繋がっていきま。今後多くの出版社で取り組みが進むとともに、研究者のみならずにもその意義が普及することを願ってやみません。

注

*1. “predatory”は本来「捕食性の、略奪目的の」などを意味する形容詞だが、広範に普及している和訳としてここでは「ハゲタカジャーナル/出版社」の語を用いている。

*2. Beall氏が自身のブログで公開していた“Beall’s List of Predatory Journals and Publishers”は2017年に閉鎖され、現在は有志がコピーやアーカイブを共有している。

Silver, Andrew. Controversial website that lists ‘predatory’ publishers shuts down. *Nature*. 2017.

(<https://doi.org/10.1038/nature.2017.21328>)

*3. 学術雑誌の影響力を示す指標として定評があるのはクラリベイトアナリティクス社のJournal Impact Factor (JIF) だが、ハゲタカジャーナルは虚偽のJIF、あるいはJIFに偽装した信頼性の低い評価指標を示していることがある。

Xia, Jingfeng and Smith, Megan P. Alternative journal impact factors in open access publishing. *Learned Publishing*. 31(4), 2018, p.403-411. (<https://doi.org/10.1002/leap.1200>)

*4. こうした偽物のジャーナルは「クローンジャーナル」「ハイジャックされたジャーナル」と呼ばれることがあり、国内の大学刊行物でも複数の被害が報告されている。

・札幌医科大学附属総合情報センター。【注意喚起】札幌医学雑誌を名乗る偽サイトについて。2020。

(<https://infornavi.sapmed.ac.jp/jpn/news/news-library/5093/>)

・京都大学。生存圏研究所生存圏研究所の学術誌“Sustainable Humanosphere”の偽物について。2020。

(https://www.rish.kyoto-u.ac.jp/news/fake_website_of_rish_publications_ja/)

*5. ハゲタカ学術集会 (Predatory Conference)

参加料などの不当な取得を目的とした粗悪な学術集会。ハゲタカ出版社がハゲタカ学術集会を主催している、または主催者と関わりを持っていることもよくある。

McCrostie, James. Predatory Conferences: A Case of Academic Cannibalism. *International Higher Education*. 93, 2018, p.6-8. (<https://doi.org/10.6017/ihe.0.93.10425>)

*6. Scopusではユーザー登録をしていなくても収録タイトルリストを確認できる。

*7. 査読レポート

査読者が投稿された論文の正確性、明瞭さ、完成度等を専門家の立場からチェックし、まとめたもの。受理審査を左右するもので、論文に修正が必要なケース等において著者に開示されることもあるが、基本的には非公開。

*8. Publons (<https://publons.com>)

クラリベイトアナリティクス社によって運営されている査読登録サービス。「査読をより迅速で、効率的かつ効果的にすることで科学を加速化する」を使命に掲げ、研究者の査読活動を支援するツールを提供している。

参考文献

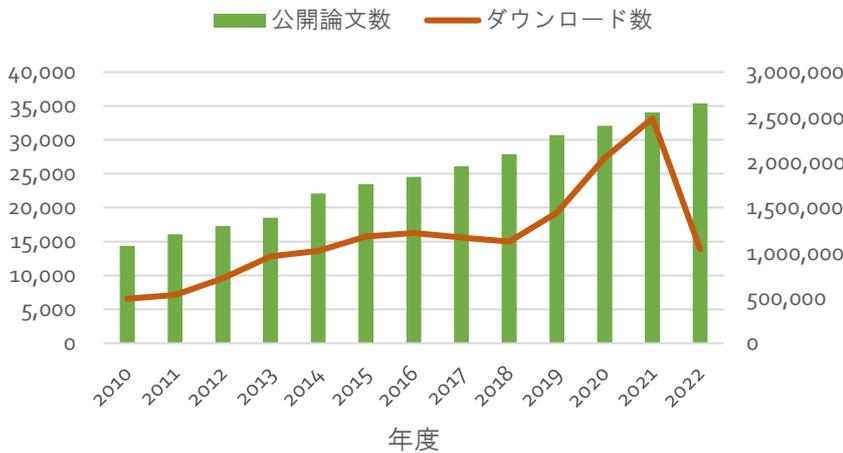
1. The Budapest Open Access Initiative. The Budapest Open Access Initiative: 20th Anniversary Recommendations. 2022. (<https://www.budapestopenaccessinitiative.org/boai20/>)
2. Beall, Jeffrey. Medical Publishing Triage : Chronicling Predatory Open Access Publishers, *Annals of Medicine and Surgery*. 2(2), 2013, p.47-49. ([https://doi.org/10.1016/S2049-0801\(13\)70035-9](https://doi.org/10.1016/S2049-0801(13)70035-9))
3. Kurt, Serhat. Why do authors publish in predatory journals? *Learned Publishing*. 31(2), 2018, p.141-147. (<https://doi.org/10.1002/leap.1150>)
4. 神戸大学附属図書館. 投稿先学術雑誌の評価指標. (<https://lib.kobe-u.ac.jp/userguides/staff/#a6>)
5. 京都大学図書館機構. 粗悪学術誌に関する注意喚起. 2022. (<https://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/content0/1387404>)
6. 奈良先端科学技術大学院大学研究推進機構研究推進部門. ハゲタカジャーナル. 2021. (<https://www.naist.jp/kensui/information/predatory-journals.html>)
7. 熊本大学 URA 推進室. ハゲタカジャーナルへの投稿リスク・ハゲタカ学術集会への参加リスクについて (注意喚起) . 2021. (https://poie.kumamoto-u.ac.jp/URA-web/publication/predatory_journal.htm)
8. Grudniewicz, Agnes, et al. Predatory journals: no definition, no defence. *Nature*. 576(7786), 2019, p.210-212. (<https://doi.org/10.1038/d41586-019-03759-y>)
9. 山田祐樹. 捕食学術誌とのつきあい方 (特集 研究を社会に伝える). *心理学ワールド*. 96, 2022, p.13-16. (<https://psych.or.jp/publication/world096/pw05>)
10. MDPI. Comment on: 'Journal citation reports and the definition of a predatory journal: The case of the Multidisciplinary Digital Publishing Institute (MDPI)' from Oviedo-García. 2021. (<https://www.mdpi.com/about/announcements/2979>)
11. Olivarez, Joseph D., Stephen Bales, and Laura Sare. "Format aside: Applying Beall's criteria to assess the predatory nature of both OA and non-OA library and information science journals." *College & Research Libraries*. 79(1), 2018, p.52-67. (<https://doi.org/10.5860/crl.79.1.52>)
12. NISTEP. 第4章 研究開発のアウトプット. 科学技術指標 2022. (<http://hdl.handle.net/11035/00006730>)
13. 佐藤翔. 特集, 研究倫理 : 査読の抱える問題とその対応策. *情報の科学と技術*. 2016, 66(3), p.115-121. (https://doi.org/10.18919/jkg.66.3_115)
14. Kulkarni, Sneha. What causes peer review scams and how can they be prevented? *Learned Publishing*. 29(3), 2016, p.211-213. (<https://doi.org/10.1002/leap.1031>)
15. Transparent peer review one year on. *Nature Communications*. 7(13626), 2016. (<https://doi.org/10.1038/ncomms13626>)
16. Nature is trialling transparent peer review — the early results are encouraging. *Nature*. 603(8), 2022. (<https://doi.org/10.1038/d41586-022-00493-w>)
17. Parks, S. , and Salil Gunashekar. Tracking global trends in open peer review. *The RAND BROG*, 2017. (<https://www.rand.org/blog/2017/10/tracking-global-trends-in-open-peer-review.html>)

2022年8月29日（月）、神戸大学学術成果リポジトリ **Kernel** がリニューアルいたしました。スマートフォンやタブレットからも利用しやすく、そして動画などPDF以外のフォーマットも閲覧しやすくなりました。

Kernel では論文だけでなくあらゆる種類の学内研究成果を対象に収集しております。今後とも **Kernel** へのご理解・ご協力をお願いいたします。



Kernel 統計（公開論文数とダウンロード数の推移）



公開論文数の増加とともに、ダウンロード数も順調に増加しています。今年度分は8月末時点での数値ですが、順調にダウンロード数が伸びています。

これからも研究成果が広く読まれるよう、公開に努めてまいります。**Kernel** へのご登録、お待ちしております。

Kernel 通信 第27号 2022年9月22日 発行

神戸大学附属図書館 電子図書館担当

特集 佐藤・谷口（オープンアクセス推進WG）

インタビュー協力 大場・佐桑・山下（オープンアクセス推進WG）

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町 2-1 社会科学系図書館 3階

Email : repo@lib.kobe-u.ac.jp Tel : 078-803-7333 Fax : 078-803-7336